

【ポスター発表】

福祉系大学生の障がい者に対するに外見的理解と概念的理解について

— 1年生と4年生の比較—

○ 金城大学 岡村 綾子 (003446)

キーワード：福祉系大学生，障がい者，理解

1. 研究目的

社会福祉系大学の学生は学年進行に伴い障がい者に対して関心をもつようになり、理解が深まるような態度の変化が見られたが、障がい者に対する顕在的態度(たてまえ)と非顕在的態度(ほんね)とは一致しなかった。そのため、非顕在的態度に及ぼす変数を探るため、「障がい者とは」と尋ねられた場合に描かれる障がい者のイメージについて検討した結果、障がい者のイメージは概念的な理解より、見てすぐ気づく外見的な理解に基づく場合が多いことがわかった。そこで、大学1年生と4年生を対象に障がい者に初めて出会った時に障がい者とわかった理由と小・中学生に対して障がい者について説明する場合の説明内容を求め、外見的理解と概念的理解の学年進行に伴う使い分けについて検討することにした。

2. 研究の視点および方法

1) 調査協力者 A福祉系大学の2016年度1年生128人と4年生156人、計284人を調査協力者とした。

2) 調査内容 障がい者に対する読書の有無、障がい者に関するテレビ等の視聴の有無、一般的な問いかけによる障がい者に対する態度、障がい者と考える状態、初めて障がい者と関わった時期とその人が障がい者とわかった理由、地域の小・中学生に障がい者について説明する内容などとした。

3) 調査手順と調査用紙の回収 1年生は後期のオリエンテーションの機会を利用して、4年生は年度初めのオリエンテーションの機会を利用して、質問紙を配布し、自記式集合調査を行った。質問紙調査用紙については、1年生は128人に配布し、124人から回収でき(回収率96.9%)、4年生は156人に配布し、135人から回収できた(回収率86.5%)。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて実施した。調査対象者には、研究の趣旨や得られたデータは研究目的以外には使用しないことについて説明した後に調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。

4. 研究結果

1) 障がい者とわかった理由 初めて障がい者と出会ったときに障がい者と分かったのはなぜかという質問に対して1年生122人、4年生124人が回答した。「身体が不自由」「車

いすに乗っていた」「言葉にならない話し方をしていた」など外見でわかるものを挙げた者は1年生が85.8%、4年生が74.5%であった。この質問では、障がい者について、障害をもつ人と健常者ではない人という2種類の表現で尋ねた。1年生では障害をもつ人で尋ねた場合は76.8%、健常者ではない人で尋ねた場合は74.7%が外見でわかるものを挙げた。4年生では障害をもつ人で尋ねた場合は73.3%、健常者ではない人で尋ねた場合は75.6%が外見でわかるものを挙げた。

2) 小・中学生に対する説明内容 小・中学生に対して障がい者についてどのような説明をするかという質問に対して1年生113人、4年生98人が回答した。「障がいをもつ人は、同じ人間であり、何かしらの不自由がある人。その人は、決して不幸とは限らず、ただ人の助けを必要とし、その助け次第では、健常者と何ら変わりのない人」というような概念的説明を行った者は1年生が68.1%、4年生が39.8%であった。「体が不自由な方のことや人の力が必要な方」のような外見的説明と概念的説明を交えて説明した場合を含む外見的説明（以下、外見的説明）を行った者は1年生が31.8%、4年生が59.2%であった。また、障がい者について、障がいをもつ人と健常者ではない人という2種類の表現で尋ねた。障がいをもつ人で尋ねた場合は、1年生では回答した58人のうち、概念的説明が70.7%、外見的説明が29.3%、4年生では回答した47人のうち、概念的説明が44.7%、外見的説明が55.3%であった。健常者ではない人で尋ねた場合は、1年生では回答した55人のうち、概念的説明が65.5%、外見的説明が34.5%、4年生では回答した51人のうち、概念的説明が35.3%、外見的説明が62.7%であった。

5. 考察

障がい者とわかった理由には外見でわかるものをあげた者が1年生も4年生も多かった。しかし、小・中学生に対して障がい者について説明する場合には、1年生は4年生よりも概念的に説明している者が多く、逆に外見だけで説明している者が少なかった。1年生のほうが概念的な説明をしている者が多いことについては、大学入学前の小・中・高等学校の間に障がい者に関して学んだり、経験したりしたことが影響していると考えられる。その理由として、調査時点で1年生は大学で障がい者についての講義をまだ受けていないからである。また、外見的に説明すると非顕在的態度を示すことになるので顕在的態度を示したとも考えられる。4年生が1年生ほど概念的に説明する者が多くなかった理由として、自分の解釈ではなく、事実(外見)を伝えることが誤解を招きにくいということ、障がい者に関する講義をうけたり、実習やボランティア活動を行ったりしたことの効果と考えられる。しかしながら、障がい者について、健常ではない人と表現した場合よりも障がいをもつ人と表現した場合の方が、1年生も4年生も外見的に説明を行った者が少ない。見てすぐ気づく外見的な理解に基づいて表現することと非顕在的態度と関係していると言えるかもしれないことより、“障がい”に対して非顕在的態度を有している者が少なくないと考えられる。